

---

# 草の想い

R Y U

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

草の想い

### 【Nコード】

N8069E

### 【作者名】

RYU

### 【あらすじ】

殺し屋恵子と舞台役者のたまご陽子は東京で共同生活をしている

## 昔々

ついてない・・まったくついてない、私はイラついている。まったく昨日気合入れて学校休んで、美容院に行つて、さ・ん・ま・ん円もかけて金髪にしてストリートかけてトリートメントもバツチリしたつていうのに・・んーもう愛子さんから頂いたこのバラの刺繍の入ったセーラー服もみんなみな！ 没収された なに？この毛染めメ・メ・メンズ・よ・うナメテンのかコノヤロー 殺すぜーたいころす

「ねえねえ聞いたきいた」

「なに？」

「お케이よお케이」

二人は生徒指導室のある3階のトイレで歯を磨いていた。ヨウチャンはグジュグジュツとうがいを済ませると、出口から進路指導室を覗いた。

「又やつちゃったらしいよ」

「また？」

目を丸くし ため息をつくと、真紀は左の奥歯を磨きながら鏡越しにヨウチャンの様子を伺った。

「髪の毛染めちゃってまつきんきなんだつて」

ヨウチャンの一言に一瞬吹きそうになり、真紀はうがいをしてヨウチャンの後ろについた。

「で？」

「で」

ヨウチャンは、片目をつぶり進路指導室に指をやった。

「何考えてんだか」

「さあ」

深刻な真紀に、ヨウチャンは明るく答えた

「色黒に金髪でしょー・・・合わないでしょーフツウ。せめて茶髪くらいにしとけばねえー・・・っあ！ねえねえ真紀、ぜったいおケイの事だから眉毛黒だよ、黒、黒」

「うん」

「それにうちの制服ってさ水色だよ」

「うん」

「おかしいよねー」

「うーん」ヨウチャンは恵子の姿を、あれこれ想像しては笑った。真紀は、頷いてはいたが内心恵子の処罰、進路指導室で何が起っているのか気が気ではなかった。しかし自分に何も出来る筈も無く、結局いつも通りヨウチャンの聞き役となった。

ぜったいぶっ殺す 何ではげ・・・っていうほどはげてないけど

ブタ・・・っていうほど太っちゃいないけど 何でオヤジそうそうオヤジよ、なんでオヤジのいる前で着替えなきゃならんわけ

金とるぞ

金金金！

「田中終わったか」

「っあ」

ジャージに片足を突っ込んだとき、奴は声をかけてきた。

「わるいわるい」

AーもうAー

「セクハラだ！セクハラ、セクハラ」

大きな叫び声に、ヨウチャンは駆け出し指導室のドアを開けた。

真紀もおるおると指導室に向かう。

5秒も立たないうちに、野次馬で指導室の前はびっしりと埋め尽くされた。

真紀は廊下に取り付けてあるベンチに上がり、中の様子を伺った。

私をかばうように、ヨウチャンは学年主任の戸塚と言い争っていた。真紀はただ見ていた…私を…

しばらくすると、他の先生達もやってきた。

ヨウチャンは、怒鳴りながら泣き出した。

野次馬達の視線は冷たいものとなり、統一された意思是先生達の言葉をせき止める。

いくら論理、理屈を考えようが意思の塊の前では、焦りという感情が駆け回るだけで覆す言葉など誰一人出てこなかった。

戸塚は腕を組み目をつぶっていた、日本人得意のだんまりである。これしか方法が無い、というかオーソドックスに適切な対応なのかもしれない。

沈黙が続いた ヨウチャンは私に抱きついた。私は野次馬に目をやると、真紀を探し睨み付けた

真紀は身をすくみベンチから降りると教室に向かった

「真紀」

怒鳴り声が空気を壊した

「いくよ」

私は、ヨウチャンの頭を撫でながら真紀の元へ歩いた。野次馬も先生達も、誰も止めなかった

教材室をすぎ階段をすぎ三人はトイレに入った

「つかれた」

「ヨウちゃんありがとー」

二人の変わりように真紀は目をパチクリさせた。

「真紀あんた帰ろうとしたでしょう」

「っえ！ あっだって」

「もうお케이いって、分るわけ無いでしょあんな遠くにいたら」

「え、見えてたの？」

「うん、怒鳴つてるとき何回かサイン送ったけど、真紀お케이ばかり見て全然気付かないんだもん。しまいには佐藤とか江原とかくるし、江原うるさいじゃん話し長いしさー」

「だから泣いたの」

「うん」

「ええ！」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。武器よ武器、弱いものにはみんなよ・わ・い・の。ねえおケイ」

「うん？うんうん」

「おケイ知ってたの」

「うん」

「っていうわけでー、カラオケね」

「え」

「昨日で反省会も終わり、無事演劇祭は終わったわけで。今日から部活は休みなのだ」

「だからカラオケ？」

「うん？おケイなにしてるの」

「うん？おしっこ」

ヨウチャンは、鬼の形相でドアをこじ開けてきた

「おケイ、あんた私のプリン食べたでしょう」

「うーん？…食べた」

「真紀…どこいくの」

「きよ、教室」

「又逃げるの」

「え？だって…歌うのは…」

「私、聞くのはおケイ、払うの真紀いつも通りよ」

二人とも毎度の事ながらに、陽子の勝手なわがままに振り回され、3時から10時までカラオケにヨウチャンの歌を聴き、最後は何時も、朝が来るまでマクドナルドで陽子の話に付き合わされていた。

親友だった考えるばっかの真紀にはヨウチャンはまぶしく、考えないで動く私が羨ましくほっとけなかった

ヨウチャンもつらい事も楽しい事も二人がいないとダメだった

…そして私も力になってくれる真紀そして・・・

## 鎖

人は誰しも怯える。

それが何時、何処でなど私には判らない。…わからない、まったくわからない。ただ怯えている。何時から？ 判っている。どうして？ わかっている… 判っている。全部判っている。私がしてきた事だ、全部判っている。

ただ…ただわからないのは…

「次は目白、目白」

自問自答の時間は終わりヘッドフォンに手をあてる。多分目の前の誰よりも私の時間はゆっくりと動いている、みんなそれぞれ時を過ごしている。新聞を読んだり、友達同士で憧れの先輩についてあれこれ…視線が後ろ髪を突き刺す。刹那私の身体は氷となりガタガタと頭部が揺れる。恐怖を奥歯でかみ殺し振り返る、あくまで自然に決して目に力をこめてはならない。…子供だった。私の氷は消え23歳の女の子の隙をだしバイバイと手を振り次の車両に移った。

「む・か・し・ひーとの・ところに…」

私の時間は加速する。この車両にターゲットは存在し、この車両にいる全員が私の目撃者となりうる。

「ことばひーとつ…うまれて…」

「紺のスーツの男」



分っている二週間いつもこいつはこの車両に乗り、ドアのすぐ横に座る、座れないときは目の前に立ち電車の揺れにあわせて座ってるやつを蹴飛ばす。まったくせこいやつだ。とても銀行の裏金を横領した男とは思えない。「伝えてーね、この声を」

ぬいぐるみの詰まった紙バックに手をつっこみ、サイレンサーを取り付けた小型のピストルを…

そうこの瞬間、電車が止まる時のこの揺れ。こいつはバッグを大事そうに胸の前で抱えふんばる…OKいつもどおり。私ははよたつきながらこいつに倒れる。

「くさのおもい」

走ってはならない、階段を上る時も 走ってはならない、改札をくぐる

この列…硝煙が紙バックからもれてる…くちをまるめ脇にさし、切符をポケットから取り出す。

自然でなければならぬ…恐怖？怒り？焦り？

怯えている？大声でわめき散らしながら逃げ出したい…走り出した…自然でなければならぬ

「お疲れさま、お케이」

真紀は明るい顔で私を迎える 安堵が漂い私も微笑み返したくなる…目をつぶり平靜いや氷を取り戻すと…ゆっくりと息を吸い込み…微笑みながら目を開ける

「お疲れさま」

「いつもどおりしておくね」

「ええ、いつもどおりで」

紙バックを渡しタクシーに乗り込む  
前しか見ない。私も真紀も進むことが……だったから。

## ルームメイト

呼び鈴で目が覚めた

まったく子供じやないんだからどんだけならしてんの

髪をぐしゃぐしゃとかき回し3回撫上げてソファから立ち上がった

「お帰りヨウチャン」

「お帰りって寝てたの」

「う、うーん」

「まったく5分も待ったんだかね5分も」

「ゴメンゴメン」

今日もお嬢はぷりぷりにご機嫌斜めですか。

「遅かったじゃないご飯にする？」

「いいよ、たべてきたから」

「たべてきた？」

「どこだよ」

「思い出の場所よ」

「思い出の場所？」

「吉野家よ」

やっと笑顔で私に振り向いた。

「ああ、あそこなら年中む・ちゅ・う・だもんね」

決まった、これは決まった久々に場外いっちゃたんじゃない

「…はあ？それ無休だけど」

「ん？だから」

ぷりぷりしてるし

「だよー」

「まーたくおケイは、よくそんなオヤジギャグ恥ずかしげもなく堂々といえるわね。はつきりいって寒いんですけど」

「寒い？暖房つける？」

「天然か」

なんだかわかんないけどつつこんできた

「それよりおケイ」

あつエアコン消しちゃった

「なに？」

「今日何の日だか分ってる」

「ん？」

ナニ？すんごい怒ってるんだけど…顔は笑ってるんだけど怖いんですけど…

「家賃よ家賃」

「あ！」

「あつて、何あつてまさか今月も払わない気」

「うん、は、はらうよ」

ピンチ！あしたなのよねー振込み。明日って言ったら怒るかなー200の…来週北海道でー今月もかさむですよ…のこりじゅーごまなかー

「明日じゃダメ？ほら銀行…もうやってないし」

「銀行？ATMあるじゃないコンビに行けば24時間年中む・きゅ・う」

「…うんでもねヨウチャン今月10万くらいしかなくって」

「だから…なに。いいわよ10万で35万耳そろえては難しいの位わかるわよ。まさかおケイ10万使っちゃうわけじゃないでしょうね」

「払うわよ、払うつて15万ちゃんと払うから」

「え？15万払えるわけ…どういうこと？」

「ん？うん」

あちゃー口が滑った、ヨウチャンに責められると弱いんだよねー、お嬢怖いから…ほら、うわーど、どうかなーうんと、うんと「おケイなんで10万が15万に増えるわけ、ホントいくら持つてるの」

「に・に・に・に・」

「何につて、20万あるの、本当？本当はもつとあるの？22万？25万？29万？うん？うん！」

怖いよーねずみ色のコーナーポストに追い詰められ姫は大ピンチなのだー誰かかつこいい王子様キムタク助けてー

「何であんた冷蔵庫にしがみついてるわけ」

「え！あ、え！あ、うーん恵子はやめなって言っただけどね」

「だれに」

「うん？うーん…象さん」

「象さん？」

「そうそうクレヨンしんちゃんの象さんがね、恵子はダメだよって言っただけどね、象さんこんなに大きいから恵子怖かったから。でもちゃんと言ったよ、だめだよって、それはヨウチャンの大事なもんだよって。でもね象さんね恵子の話全然聞かないでね…食べちゃったの」

「うーん、ふー…おケイ、あんた又食べたの」

「恵子じゃないよ、恵子じゃない象さん、象さんだよ」

冷蔵庫を開けて中を見せた、これでOK

「おケイ、無いじゃない。無いじゃない！私のプリン」

本当単純、しょうがない北海道温泉は止めて銃だけ手に入れるか

「きゃー、だから象さんだって」

「どっからくるのよー、こんなでっかい象さん。ドアぶち壊れてるでしょうが」

コントみたいにヨウチャンと私はソファーをぐるぐる回る

あれから十年私達はそれぞれの思いと理由で、静岡を離れここ東京で暮らしている。

## 前日

「ねえおケイ」

二段ベットの上からヨウチャンは声をかけてきた、お嬢が上で私は下なのだ

「なーに」

「明日、主役のオーディションなんだ」

「ふーん」

毎月言ってる

「今度こそ絶対受かりたいの、いままでミュージカルばかりだったじゃない。今度は歌や踊りがない新劇なの」

「新劇？」

「そうしかも、浅井和則さん原作の斎藤和先生の書き下ろしの台本で、演出は小山真美先生。しかももしか音楽はあの山田五郎さんなんだって」

誰ですかその人たちは…やまだごろうつてたしかキューピーちゃんに眼鏡かけたよくテレビでいじられてる人？

…あの人作曲する人だったんだ

「それにね今日願掛けにいったんだ」がん・か・け？お嬢の専門用語はよう分からん

「おケイ覚えてる」

なに？急に振ってきたけどギョウカイの事なんてワイドショーの事しか分かんないよー、私お嬢みたいにマニアじゃないし

「なに」

とりあえず答えた

「私とおケイが、東京で初めてあった場所」

「吉野家」

「あの時私初めて並じゃなく大盛り頼んだんだー、そしたら店員さん間違えておケイのともってったんだよねー」

そう大輔のおかげ、お嬢週に三回火曜と木曜と金曜ドトールのバイト終わって原宿の吉野家でお昼食べる習慣になってるらしく。一ヶ月くらい私も通ってたのだが、目の前に座っても、横に座っても全然気付かなかったわけ。

で、それを見ていた大輔が私に声をかけてきて…初めは何だこいつナンパか？と思ってたけど、結構地味なやつでさ。

今でも、お嬢の事をちくいち報告してくる…いい舎弟だ、うん。

「うん覚えてる、私もまさか東京でヨウチャンに会えるなんて…運命かなー、なーんちゃって」

真紀におばさんから住んでる場所、バイト先、通ってる学校そして連絡先、全部聞いてたからね、探すのは簡単だったんですよ。

「うん、私も運命だと思うよ。ホントに…もしあそこでおケイに会ってなかったら私…静岡に帰ろうと思ってたの。誰もいない東京でお芝居は上手いかないし、バイトで忙しいし、お金無いし楽しかったけど…ただ毎日働いてお金かせいで、高い授業料払って、何とかレッスンだけ受けて…他の子達は公園で練習してるってのに…」  
「食べてやるー大盛り食べてやるー大盛り食べて静岡に帰って、結婚しようと思ってたんだ。」

お嬢…だからあの時半ベそかいてたんだ…てつきり彼氏かなんかに振られたのかとおもったよ…？

「えー」

「何よ、大きな声だして」

「ヨウちゃん結婚しようとしてたの？」

「うん」

「誰？、ヨウチャン高校時代部活ばかりであと遊ぶの私だけだったよねー」

「イタツ、思わず飛び起きて天井のキムタクとキスしてしまった」

「ちよつと大丈夫」

「うん、大丈夫、大丈夫そんな事より誰、相手は私の知ってる人？」  
こんな事で泣いたりしません、私はプロですから

「あーいなかったわよ、ただあの時は結局私はただの女で、女の幸せは結婚かなーって思っただけよ」

「なーんだ」

お鼻痛いよーキムタクのバカ

「どうしたのおケイ」

お鼻痛いの

「なんでもない…頑張ってね明日の発表会」

「もー発表会の前のオーデイション」

「とりあえず寝坊しないために今は寝るのだー」

「そうね、お休みおケイ」

「お休み、ヨウちゃん」

お鼻痛いよー



## オーディション

次の日の朝早く、お嬢はハイテンションで起き上がってきた

「よし今日もバリバリにやちやうよーん」

うるさい朝は弱い、無視無視、私は眠り姫

「おケイ起きたー今日オーディションだからもう行くね」

あつそうですか、どうぞどうぞおかまいなく。どうせ又生理みたいに、更年期障害のような、起伏の激しい日々が始まるんですよあな  
たは。あーいやだいやだ、あたしゃーさっさと北海道行って。銃、  
手に入れたらのんびりしてるかなー、仕事どうせ半月ぐらい無いだ  
ろうし。いやなんだよねーあのどんよりとした空気。どうせお酒ば  
っかり飲んで帰ってきて、可愛く食事の支度して待つ私を、昨日み  
たいにぼーりよくでうさをはらすんだ、っあそうだスマップの、全  
国ツアーコンサートでも観にいこーかな…そうすると、えっとえつ  
と…

そんなことを考えてるうちに、ヨウチャンは出てった。

「がんばって！ヨウチャン」

ヨウチャンは日が昇ったばかりの朝5時半、始発の西武新宿線に  
乗り新宿で下りると、JRに乗り換えて原宿に向かった。原宿駅の  
裏にある代々木公園に着くと、トイレでジャージに着替えた。ラジ  
オ体操して公園を二週回り、そのあと腹筋、腕立て、スクワットe  
tcまー筋トレですな。

なんでも役者は体が基本だそうで、私から言わせてみれば役者は顔  
だと思っただが…

怖くてとてもそれは言えない…まっ別に、ブツサイクって言う事も  
無いんだけど、なんていうかはなが無いって言うか胸が無いって言  
うかなんにも無いって言うか向いてないって言うか。まー本人がや

りたいつていつてるからねー、しょうがないのかなー。

そういえばこないだ観にいった時なんて、何処にもいなかったし。なんかスタッフで時計もってなんか言ってたっていうけど、私には全然何も聞こえなかったけど。お嬢燃えてるからねいいんじゃないの私はチケット10枚2万円分買わされて…つまそれぐらいしかしてあげられないからね。

時間は朝の7時10分

そんなこんなで美しい眠り姫が、イケ面王子達にちやほやされる夢を見てる頃。かわいそうなシンデレラはバカみたいに筋トレに励んでいました。

「おはよう高次」

「おはよう」

爽やかなガラガラ声でヨウチャンに声をかけ、ジャージに着替えると缶ジュースをヨウチャンに渡しベンチに座るとタバコを吹かした。このたんそくで馬面王子こと斎藤高次は今回ヨウチャンのオーディションの相手役なのだ。

「ごめんね、今日しか時間取れなくて」

「いいよ、気にしなくて芝居なんてその日その日で微妙に変わるんだからさ。今日のテンションがが上手くいければ、それが俺達のベストだって」

「そうね、ありがと」

ヨウチャンは十一期制、そして馬面王子は一五期制。年はヨウちゃんやんが二三の馬面王子が二十一と年下の後輩なのだが、馬面王子…なんか言いにくいな王子は、いや馬面は主役こそ取ってないもの。ここ4年十一回の舞台で全て出演し台詞も出番もかなり多い、二、三回他の劇団の舞台にも出たりしている。その点ヨウチャンは…う悲しいシンデレラ

「じゃはじめようか」  
「うん」

どんなイケ面でも私の心を掴む事なんて出来ないのなぜなら私の心は……きやー

「ぐすん起きてしまった」

一番いいところで起きてしまった。ばかばか恵子のおばかちゃん。膨れて顔を振る可愛い姫。然し見上げるとそこには、い・と・し・の・きやー。そして姫は王子に見つめられ目を閉じる……。んー覚めちゃった、時計に目をやると11時15分……。はじまったかなあ

原宿竹下通りを500M位進み、左手にクレープ屋がある所を右に曲がり坂を少し登ったとこヨウチャンの通う劇団の稽古場があった。ここ劇団ピクニツクのオーディションはなんか知らないけどめちゃくちゃ厳しいらしい。

「ハイではつぎー」

この頭のとっぺんから声を出してるオカマが大熊伝七称マリリン、この劇団の演技指導の先生で、オーディションの決定権があるエラーイ人なのだ。そして今日も今日でピターとしたピンクのラメで、キンキラのタイツって言うかレオタードって言うかとにかくキシヨイ。ぽっこりお腹出てて、あそこもモッコリしてる。よくこんな奴なんかにと一緒に息吸えるか、理解に苦しむ。

「藤本陽子宜しく願います」

「斎藤高次宜しく願います」

「はいそれでは、いきむあーすう。エンゲル係数と・うわ・とう・あ・すい。ラストスイーン、うーん、たからくじ!!」

「すみちゃん」

「何？」

「愛してる」

「……うん、愛してる」

「じゃさじゃさ今夜…」

電話の呼び鈴

「ハイ桂木ですが…すみ子ですか？ハァーいですが…すみちゃん斎藤って男の人」

「つえ、アーバイト先のマネージャー」

「フーン」

「ハイ鈴木です、エッ来週ですか？来週はちょっと…」

「クアアット！ーブアットブアットバットマーン！ーほんと次の悪役は誰がやるのかしら、ジムキャリアーにシュワちゃんその後出てないのよねーこれって言うのが。やはりこれから変でウイルスミスかジャツキーあたりをお願いして世間をアッ！ーって驚かせないといけないと思うの、そうよ次回のバットマンはウイルスミスかジャツキーまたはジャツキーかウイルスミス。それぐらい大事マンブラザーズなのよー！！！」

突然のカットに二人は、その場に立ち尽くした。

ヨウチャン曰わく、演出家様がカットを入れたら役者はその場を動かず、演出家様のイメージを損なわないよう手を付けて貰うチャンスだという事らしいけれど…恐いからビクついてアホみたいにオカマに、あーだこーだ言われ、肩だ腰やお腹触られるなんて…キモイ…キモすぎる

「はい！」

二人は軍隊か学生のように、直立不動でポツコリモツコリを真面目に見ていた。

「なに？二人は何なの、何をしてるというの」

「はい、恋人同士で最後のラブシーンです」

「そう、そうよ恋人と同士すなわち恋人同士。ミス藤本プリティーマンは見た」

「いいえ」

「駄目だこりゃー」

「ええ？」

「嫌駄目だ、駄目だマリリン。確かに教師生活25年、時には雨の日も風の日も会った。何度会津若松の蕎麦屋に戻ろうと思った事が、然し私はオカマ塾塾長大熊伝七である。ここで私がサイを投げてしまつては新スーパーマン2の映画化はない。そして現代舞台芸術における巨匠、林家パー子は生まれない。さあ立ち上がるのよみんなそして私と進むのあの北斗七星の横に輝く星こそ私達が目指す星、仮面ライダーV3の星なのよ」

マリリンの言葉に、劇団員全員目をキラキラさせこう答えた。  
「はい」

なんかわかんないけど、長いから次回に続くのだー

## オーディションの続き

シンデレラは王子と共に舞踏会で踊ります。然しそこに意地悪なオカマが現れてさー大変！

「いい、恋人同士というのは台詞で教えてくれます。バート然し二人がステージに上がり、スポットを浴びる。そしてお客さまの目に入った瞬間にはもう、恋人同士になっていなければならないの」

「ハイ」

マリリンの言葉に二人は答えた。

「二人の存在を恋人と表す、台詞以上の説明。それが何なのかわかりますか？」

「いいえ」

馬面高司は目を丸くし答えた。

「メニコンです」

「メニ・こん・ですか？」

馬面とヨウチャンは息を合わせたかの様に答え、首を傾げた。

「そうメニコンよ、すなわちアイコンタクトとレンズ。空気を通すの」

「？はーあ」

「さあ二人ともここにお掛けなさい」

「はい」

二人は言われるままイスに座った。

「いいですかこれではただのむかえ合っているだけの二人です。ミスター斎藤そしてミス藤本目をつぶり思い出すのです。相手とどんな風に出会い、何を語り、なにを思い、どんな時間を過ごしてきたか。二人が送って来た恋の軌跡を声を出して確かめ合うのです。

そして今、目を開ければめのまいいる相手が自分にとって何なのか……そこからです」

二人とも目をつぶったまま苦しそうに考え事をしていたが、そこは

やっぱり我らがヨウちゃんが切り出した

「私は春、いつもと同じ場所、そしていつもと同じ時間にいる彼を見ていた」

「僕はいつものように、帰る途中の乗り換え場で、春彼女の横に座った。そしてMDの取り方に困っている彼女に、教えてあげた」

「ごく単純な単語のやり取りで私は電車を下りた。そして次の日二人は同じ時間、同じホームの上にた立っていた」

「僕は彼女に気付く軽く会釈した、次の日も、次の日も・・・」

「夏の暑い日、彼は来なかった、次の日も、次の日も・・・」

「里帰りし、僕は余ったお土産と一緒にホームの上にいた」

「私は彼を見つけると、何故か駆け足で近づき話を聞いた。彼がなぜ数日来なかったのか知りたかった」

「僕は彼女にあまりの土産を渡しと里のことを話した。話が夢中になり、つい彼女の駅を通り越してしまった」

「私は、彼の事をもっと知りたかった。だから」

「戻りの電車を待つ間話をした、電車が一本、また一本と流れて行く...最後の電車が止まった」

「時間はあっという間に過ぎていったらしい。私はすぐに彼の携帯にかけ続きの話をした」

「僕は、それから駅を四つ歩いて帰る事が多くなった。そして東京に着てから時計になっていた携帯が、しっかりその役目を果たしてきた」

「彼はお寺や神社、信長とか坂本竜馬とかそういう歴史的な事柄が好きで」

「彼女はテニスにスキー、スポーツを挙げたらなんでもこいつて言ってた」

「私達に共通なところなど何一つ無かった」

「ただ時間が二人を引き付け合わせていった」

「並木道がイルミネーションで飾られ、何処に行ってもクリスマスソングが流れている」

「最終の電車に乗り遅れた二人は、街灯で輝くスポットライトの中・・・初めて触れ合った」

二人は目を開け、お芝居を始める

「すみちゃん」

「何？」

「愛してる」

「・・・うん、愛してる」

「じゃさじゃさ今夜・・・」

電話の呼び鈴



「ハイ桂木ですが・・・すみ子ですか？ハアーいますが・・・すみチャン斎藤って男の人」

「っえ、アーバイト先のマネージャー」

「フーン」

「ハイ鈴木です、エッ来週ですか？来週はちよつと・・・」

電話を気にしながら新聞を読んでいるとある一覧に目が止まる

「すみちゃん、すみちゃん。」

宝くじは？」

「宝くじ？あつテレビの上」

テレビの上の宝くじを取り、新聞と照らし合わせる

「違う・・・これも、これも、うん？すみちゃん、すみちゃん」

「えーですから・・・あつすいません、今料理の途中なんでその件は今度、では」

電話を切り椅子に座る

「何、当たったの？」

「いや、違ってた」

「なーんだ」

「アア番号は合ってたんだけど組が違ってた」

「エッ、何等と番号が一緒だったの」

「一等だよ一等、一億二千万だぜ一億二千万・・・当たってればな」

「ひよつとしたら」

宝くじを取り上げ新聞を読む

「あつた組み違い賞」

「くみちがいしよう？」

「一千万円だつて」

「いっ一千万！？」

新聞を見入る

「本当だ、組み違い賞。一、十、百、千、万、十万、百万、・百万だよそれ」

「うん？でも当たってるじゃない。嬉しーこれ私のね」

「エッ、まつ待ってよすみちゃん。それ僕のだよ」

「私を買ったのよ」

「でもすみちゃんあの時、お金が無くて僕のお財布から半ば強引にお札三枚取り上げて…だからその宝くじは僕のお金で買ったの」

「でも買おうって言わなきゃそのままこの宝くじは誰かの手に行ってたわけでしょ。そして女の感って言うか、私のあまりの美貌にこの宝くじの方から声をかけて来たのよ」

「意見あり」

「なんですか一矢検事」

「すみ子弁護士、ここは公正明快に折半が望ましいと思われます」

「わかりました一矢検事。それは、み・と・め・ま・せん」

「では実力行使あるのみです」

じゃれあう二人、宝くじが床に落ちる 二人の手と手が宝くじの上で重なる

大事に二人の手で宝くじを掲げる

「すみちゃんこれで車買わない？」

「そうね、そうしたら色んな所行きたいわね。海とか山とか」

「うん。京都とかもいいよ」

「でも明日ね決めるのは、今はもうかえられないし」

「うん、そうだね」

「ねえカズくん、私の事愛してる？」

「もちろん、愛してる」

見つめあい抱き合う二人

「んっオーケーイ!!」

このオーデিশョンで初めてのOKが出た

ヨウちゃんは馬面に抱きついたまま肩を震わせていた

## 樋口順一郎

そいつは突然ヨウチャンの前に現れた

と言っても前から劇団に入っていたらしい

そして良いか悪いかヨウチャンはオーディションに受かり、主役の座を掴んだ

配役が決まり、顔合わせと読み合わせ時、アイツ樋口順一郎はヨウチャンに接触した

アイツは稽古を口実にヨウチャンに近づき稽古場と称して朝、夜と公園やらカラオケボックスに誘い、バイト先までつきまといっていたらしい

そうしてアイツは日に日にヨウチャンに近づいていった

さらに樋口順一郎は斎藤高司を取り込み、ヨウチャンと斎藤高司をくっ付けさせた

まんまと私は樋口順一郎に躍らされ、斎藤高司に焼きもちを妬いた

けれど、ヨウチャンの幸せそうな顔に私は…

支えていたつもりだった、オーディションに落ち、いつも泣き荒れ狂うヨウチャンの傍に居るのは、私しかないと思っていた

だけど、私には悲しみを受け止める事は出来ても、幸せを与える事も、共感する事も出来ない…

私はただ…だけ

そして、ついさつき30分ほど前ヨウチャンから連絡があり、打ち合わせとかで斎藤高司と樋口純一郎が来るというのだ

私は平然を装い「いいよ」って答えたものの

込み上げてくる斎藤高司への嫉妬に、BMGショートマグナムを、

分解しては組み上げ落ち着きを取り繕い、優しく笑顔で出迎えるように頑張った

こうして私は、ドアを開け斎藤高司を笑顔で中に迎え入れる事が出来た

次に樋口純一郎と目があつた瞬間、私の防衛本能がそれを拒絶した  
「ちょっと・・・一緒にジュース買いに行かない？」

「何ですか？」

「二人きりにさせてあげましようよ」

私はあくまでも穏やかに、かつ自然に振る舞った。

「良いですよ？」

ヨウチャンが私を見ていた事は分かってる、然し振り返るわけには  
いかない殺気だったこの顔を、ヨウチャンに見せる訳にはいかない  
「分かりました」

樋口純一郎はニコツと笑うと観念したのか開き直ったのか私に氣に  
ぶつけてきた

2人は張りつめた空気のまま外に出た

勿論樋口順一郎の後ろに私はつく

セオリー通りアイツは階段を選ばずエレベーターに向かう

外に出て始めの自販機の前でとぼけた様にアイツはこう言った

「何にします」

「ここじゃない」

もうヨウチャンはいない私は私の氣を出す

「そうですか」

そう言うとは鼻で笑い歩きだした

コンビニに入りジュースの棚の前に立つ

「ふざけてるの」

構わずアイツはコーラのペットボトルをかごに入れレジに向かい精  
算をすまし外に出た

そして私達のマンションに足を向けた

「待ちな、あんた誰だ」そう言つとあいつはふつと鼻で笑つと私に振り返つた。

「聞いてないんですかさつきも言つた通り僕の名前は樋口純一郎です」

「そう言う事じゃないでしょう」

「と言つと」

「言いたくなければ言わなくてもいい」

私の気は密度を上げた

「これ以上私達に関わるな」

「意味が分からないんですけど」

樋口順一郎は目を見開き口元を上げる

「ここでも良いのよ」

私は殺気を強めアイツに近づくアイツの気は所詮作り物、本物の私にかなうわけがない

「わかりましたよ、僕の名前は本当に樋口順一郎。そして察しのとおり組織の者です。真樹さんとは別に動いて貰うべく、陽子さんに近づき…つま分かるでしょ組織のやり方くらい」

樋口順一郎は目配つた

なるほどコンビに一人アイツの後ろに一台そして私の後ろのカップルか

確かに真樹のチームとは違う

真樹のチームならインカムをしてるからすぐ分かる、然しこいつ等？なるほど…携帯か

私がアイツの手がズボンのポケットにあるのを確認すると、樋口順一郎はポケットから携帯を取り出し、顔の前へ上げ右眉を上げ顔を傾けた

「だったら直接私に接触すればいいでしょ」

「確かに…然しあなたは、田辺さんのお気に入りだった。そしてあなた自身それを誇りとし糧となり数々の功績を組織に上げてきた。」

真樹さんも又そんなあなたにそういう仕事しか与えてこなかった。だから田辺さんみたく組織には深く関わらず、仕事だけを淡々とこなして行けた。そしてあなたは身の安全と自由が確保されている」

「…自由ね」

私は携帯を見つめ口元を一瞬上げると樋口順一郎を睨みつけた、もう大丈夫槍でも鉄砲でもなんでも来て…全員ぶつ殺してあげるから私はチーム全員に気をぶつけた

案の定この中にヒットマンはいない、っていうかいたらとつくに気付いてるし

田辺さんを持ち出したっていうことは…面倒臭いなあ

「金よ金、金のために人殺してんの。誇りだの組織の考えだのどーでもいいの。つま真樹は組織の中にいてグチグチグチャグチャどーたらこーたら色々あるらしいけど私には関係ないし、どーでもいいこと」

ここまで言って私は青ざめた、自分が次ぎ言う台詞に自分自身驚いたからだ

そのショックに私の全機能は停止し、氷が私を包む

「…ま…き…なの？」

氷が私の口を固めるまえに何とか吐き出した

「違いますよ、僕はあなたの事を充分理解しているつもりです。知らないかもしれないけど組織の中じゃ結構多いんですよ、あなたのファン。まあ僕もその一人なんですがね、…そして噂の美人ヒットマンは噂が噂を呼び本人の知らない所でとんでも無いことになっている…結構組織の中で努力してるんですよあなたのために」そう言うのと携帯をしまい私の後ろにいるカップルに合図し、チームは私の視界から離れた

「もつと金になる仕事しましょうよ」

なんだこいつ？樋口順一郎の気が、変わった

「肝臓癌でしたっけ志穂果ちゃん。移植以外助かる手立てがないんですって」

勘に触る

「海外で十億…大変だー。人って殺すより生かす方が、お金ってかかるんですね」

どうでもいい

「樋口くんだっけ、私が人を殺すのはお金の為…そして田辺さんを尊敬してるのは…あなたの五分後を私が握れるように教えてくれた事よ」

「恐いなーだから汚い仕事で金をあなたは貰う、そして組織はあなたの誤解も解け忠誠心も認められ、より安全安心に自由を満喫できるっていうことじゃないですか」

樋口順一郎は私の顔を伺いながら、自分の言葉に酔いしれていた  
「それに癌細胞って、若いほど進行が早いんですって。術後も七割の確率で再発、又は転移するっていうし。再発したら…」

うざい！！

私は樋口順一郎の言葉を断ち切った

「そこまで分かってんなら、ヨウチャンは関係無いでしょ」

その一言に一瞬目を見開き、私の顔を凝視すると。何かを確認したのか、また口元を上げ目を細め語り始めた

「僕はあなたのファンです。あなたのために思って僕は陽子さんに近づきました。けれど僕は陽子さんは好きでは無い、真樹さんと違ってね。あなたは自分が思ってるよりずっと弱い。その証拠に、僕はチームを遠ざけて十分も経っているのにあなたの前に立っている。」

だから

そう思いつつも、私がとつくの昔に忘れてた覚悟が、私の喉元で深く渦巻いていた

だから

そう、この言葉は自分自身に言い聞かせてた

「あなたはヒットマンとしては超一流です。然しあなたは仕事人間じゃない。それに真面目じゃないし、何時も世の中や周りを批判し、

淋しいくせにアザケ笑って強がってる。つま簡単に言つと子供、悲劇のアンチヒロイン田中恵子さん」覚悟は出来てた避ける事も出来た

「僕があなたのファンになったのは、あなたが弱いからです。あなたが一流のヒットマンになったのは田辺さんの指導もあつたでしょうが、妹さんそして陽子さんがいなければあなたは組織に入らなかつた。ヒーローも悪役も必ず弱点がある。その弱点を克服するっていうのも悪くないですが、やっぱり僕等悪党は弱点を、握りちらつかせて言うことを聞かせるつてのが常套手段でしょ」

…ヨウチャン

「二人共知らないんですよねえ、あなたの仕事」  
私

「何時死ぬか分からない遠い身内より、近くの大親友の方が本当は大事なんですよ」

私は…

「わかつた」

その一言に樋口順一郎の顔から笑みは消え。私の顔をじっと見つめるところ言つた

「行きますか、陽子さん達待ってますから」



## 自由

私は真樹に自由を与えて貰っていたのか…

樋口順一郎に比べれば真樹は…

春、真樹と一緒に上京し三人は楽しかった。

私達は女を捨て、ただの兵器になるべく、人体の急所、力加減、証拠の隠蔽…色んな事を田辺さんから教わった…朝から晩まで、毎日、毎日…

私と真樹のコンビも、田辺さんが何時も見守ってくれたからこころでこれた。今も見守ってくれてる…最低私はそう信じてる  
田辺さんは本当にすごい、キャツキャツ叫ぶ田舎猿二人をいませえ  
ばたった一年足らずで、超一流に仕立ててくれた。

白い雪が綺麗だった

静岡では味わう事が出来なかった雪

田辺さんが作ってくれた大きな足跡を、二人は黙って確認し田辺さんの後に続いた。しんと降る雪、私がこの世界を壊す。

一週間前から真樹に聞かされてはいた…

冗談だとばかり思っていた

然し三日間、私は田辺さんから携帯用ショートボーンを渡された。

考えてはならない

今まで何人殺しに関わっただろう

真樹の初めての仕事は病院で寝たきりの老女

私は三輪車に乗った男の子をお菓子で誘い、人気の少ないデパートの屋上にある貯水タンクの裏で男の子の足を掴み壁に叩き付けた…  
何回も何回も…

躊躇してはならない

50メートル以内なら飛び道具に風の影響はほぼない  
つと言ってもあまり実践で飛び道具を使う事はない。足がつきやすいし目立つ

慎重派の真樹は、トリックで仕掛け薬物で仕留める。

私は直接この手で…と言いたいのが包丁やトンカチ、まっ身の回りどころがつてる何かで殺す。

指定された時刻

指定された場所

指定されたやり方

それが基本

何時も田辺さんが口うるさく言っていたこと

丘の上にあるこの公園の端には、電車の音を遮るため防音の柵が張られ、景観を汚す事のないよう大きなもみの樹が立ち並んでる。

指定されたやり方

田辺さんは今日も同じ場所の樹に寄っかかり、腕時計で時間を確かめるとタバコに火を付けた。

指定された場所

私はボーガンの弓を引き矢をセットする

「今日こそきめろ」

そう私は失敗した…昨日も一昨日も、田辺さんは失敗を許さない。

顔は勿論、髪を引っ張り、地べたに寝転んだ私の体を蹴り続ける。泣いてもわめいても許してはくれない。

真樹は、ただ歯を食いしばって見てるだけだった。

指定された時刻

田辺さんの問いに応えられないまま、右耳から真樹の指示が入ってきた。

「昨日と一緒に、目の前の男」

私は奥歯をギリギリとかみしめる

躊躇してはならない

ターゲットとの距離は4メートル

ターゲットは目を閉じ腕を組んでいる

ポイントは…喉

このショットボウガンの殺傷能力は3メートルから…あと1メートル、あと二歩前に進めば私は仕事場を達成でき、二百万が私の銀行に振り込まれる。

やっぱり涙があふれてきた

私は昨日、一昨日と同じようにその場に座り込む

「恵子、お前のしたいことってなんだ？妹を助ける事か？それとも結婚も出来ない女友達の陽子って奴のケツ追い掛ける事か？」

田辺さんの言葉に私の思考は完全に狂い、怒りが、悲しみが、切なさか心を飲み込み、溢れ出る高鳴りが体を突き動かした。

考えてはならない

「む・か・し・ひーとのところに…」

矢を握り立ち上がる

「どうした？狂ったか」

そう私に罵声を浴びせつつも、ターゲットは焦りの表情を隠しきれない

「ことばひーとつうまれて」

目を白黒させ私をみている。だけど体は正直ね、ほら手が樹の幹をしつかり握り絞めている。

「つたえてーねこのこえを」

なんか言ってる

でも、もう聴こえない  
逃げるの？

でも、もう遅い

「くさのおもい」

振り向きざまに、私は背後から心臓に矢をぶち込んだ。

どんな顔してるのか知りたくなり、私はターゲットの前に回り込んだ。するとターゲットは私に抱きつくように倒れてきた。

私は力いっぱい抱きついた。

暖かった

ゴメンね：ゴメンね：ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

「終わったね」真樹が来た

「うん」

「代わりの着替え、そしてこれは私が処分しておくわ」

ポーガンを抱え、紙袋を私に差し出した。

白い世界、時間は午前五時を半分くらい回ったくらい。  
このまま雪が降り続ければ、三時間ほどでターゲットを隠してくれ  
る。

二人はもと来た道を…田辺さんが歩いて来た道を歩いた

あの日、氷の心を手に入れた私は、超一流のヒットマンとして組織  
の鎖に繋がれた。

身も心も組織しだい、本当の自由なんてこれっぽっちも無い。全部  
見せかけ、作り物…

だけど、ヨウチャンの笑顔見ると…忘れちゃうんだなー何もかも  
例えそれが、作り物の世界の事だとしても

## 真樹

「お疲れ様」

「お疲れ様」

何時も通りの事後報告

「今日会わない？」

「いいよ、別に」

真樹の優しい口調に、素直になれない

「明日よね」

「…来るき？」

「いいの？」

別に来ても良かった、真樹の顔見たら、ヨウチャンどんなに喜ぶことか

「ドトール…新宿南口のドトールで一時間後」

「うん、わかった」

真樹は、本当に嬉しそうに答えた。

私は携帯を見つめ、目を細め溜め息をつく。

どうせどう動いても、2つのチームが私に張り付いている。

しかも樋口と組んでからは、部屋にまでカメラと盗聴器がここですよって、分かり易く置いてきた。

『ド変態』

私は本屋に立ち寄り、キムタクが載っている雑誌を買いまくった。

新宿駅構内にある有料トイレに入り一番奥…入ってんじゃない…鏡に立ちスキン手袋をはめナイフを洗い、ポシエットにいった。

二分後奥から頭に大きな羽根を付けた、ゴスロリ姿の女がでてきた。夢の中ならまだしも、現実ではとてもとても…でもやるんならあんなパーマしないで、ストレートの前髪パツンのほうが…でもそれ

じゃメイドか：などと考えながら、ポシェットをタンクに入れ外に出た。

ドトールの向かいにあるビルから、真樹はてをふった。

私は軽く左手をあげ、中に入りホットカフェオレを手に、喫煙席に座る。

真樹はニコニコしながらホットティーを頼むと、キョロキョロしながら私の隣の席に座った。

「久しぶり」

「えー」

二人は互いに相手のいない携帯を耳にあて、目を合わすことなく会話を進めていく。

「面倒くさいね」

「ええ」

「向かい合って一杯お喋りしたり、カラオケ行ったり美味しい物一杯食べたりたいね」

「気持ち悪いよ」

「気持ち悪い？」

「うん」

私は、キムタクの方が大事

「ヨウチャンどうしてる？」

「別に」

スマップじゃなく、キムタクだけの専用カレンダーが出れば良いのに。

「何にするの？」

「車」

「くるま？」

面倒くさいなー「もういい」

携帯をポケットにしまい本を袋に納め、私は立ち上がる。

真樹はキョロキョロしながら携帯を両手で握り耳に押し当て、立ち

上がった。

私は歩き出す

どうやら別の客が待っているらしい

店を出る…真樹はまだ立って席にいる

私じゃない？

角を曲がり、確認する

…？ 樋口…まあどっちでもいい

私はそのまま駅に向かった

「切ないですねー姉さん」

「ジュン」

「もう知っていると思うけど、僕もチーム一つもらってね。恵子さんがヒットマン」

「ジュン」

「さすが田辺さんの教え子、噂以上の人です。対象者を物としか思わない冷酷さ、大胆かつ冷静な行動、そしてきめ細やかな計画で穴が無くアクシデントが起こっても彼女なら安心して任せられる。全然一人でやっていける…すぐく勉強になりますよ。ただ…優秀すぎるところがある。組織は、危険人物として判断したみたいですよ」

「組織が…だからそれを」

「…父さんからね」

「パパが？」

「あー父さんだよ」

真樹は思わず樋口順一郎の顔を見た。樋口順一郎はさっきまで私の座っていた席で煙草をふかし、外を眺めていた。

「どうしてパパが」

真樹は樋口順一郎に背を向け、カウンターを見つめた。

「さあね…ただ父さんは自己中心的だからねー姉さんも僕も、巻き添えくらって組織にはいったし」

「違うわ、パパは私達の事を思って、組織から私たちを守るために



仕方なく…」

「僕も父さんからそう説得させられた」

二人はしばし沈黙が続いた

「姉さんは、大親友恵子さんを守るために組織に入れたんですか？」

真樹はその一言に目頭に力を入れ、必死でそれを覆い隠し平静をつくろった。

樋口順一郎は真樹の様子を横目で確認すると、追い討ちをあてるかのように、真樹に言葉を浴びせた。

「父さんは樋口自動車に乗っ取るため、母さんに近づいた。そして自動車産業から産業用ロボット、光電池開発、通信、パソコン機器と幅広く展開し組織幹部にのぼりつめた。言い方を変えれば、うちの家族は、父さんが組織でのし上がる為の、戸籍だけの…作り物の家族なんだ。…そして僕も姉さんも父さんからしてみればただの踏み台」

「だから今度は恵子が…ってこと」

「たぶん」

真樹はホットティーにスプーンを入れかきました。

「父さんからのメール…見る？A級ランクの任務だけど」

樋口順一郎はそう言うのと携帯を取り出し、真樹に送信した。

「姉さんは女だ、女は女らしくどつかの金持ちの男と結婚でもすれば？そうすればこんな使い捨てのチンピラみたいなD級ランクの任務じゃなく、父さんみたいにS級ランクでバンバン出世すれば父さんも喜ぶって」

真樹は携帯を見つめ、高鳴る激情を必死で抑えた。そして囁くような小さな声で、弱々しくゆっくりと言葉を発した。

「ジュン」

「別に無理してやる必要はないと思う。、恵子さんが仕事でミスを犯したわけでもないし、組織に反旗をひるがえしたわけでもない。ただ性格、素行に問題があるってことで、内容的にも問題がない訳でもないけど、特別問題視するほどの事柄じゃない。…たぶん僕達

の忠誠心があるか無いかのテスト…そう考えれば納得がいく」

「やらなければ…」

「さあね、ただ僕は返事はしたよ」

「ジュン」

「最悪姉さんとまたは父さんと…なんて、醜いし、嫌だね」

「ジュン」

「さっきも言ったけど姉さん、僕と父さんは戸籍上親子なんだよ…姉さんと違ってね。だからこんなD級任務で終わるわけにはいかない。だって父さんいつてくれたんだ、お前は特別だって…フフだってそうだよなー僕と父さんは戸籍上親子、例え母さんと離婚しても親子の縁はきえないんだからね」

「ジュン」

「ジュン？ジュン、ジュン、ジュンって何なんだよ何時も何時も見下したように上から物言ってるじゃねーよオレは特別なんだよ、あんたと違ってな」

樋口順一郎は外の景色を目を見開き凝視すると、突然そう叫んだ。

店内にいた客、従業員達が一齐にその声に振り返った。そして真樹もいちお客として樋口順一郎の顔を見つめた。

「あつどうもお騒がせしてすいませんでした。ちょっと仕事で嫌なことがあります」

立ち上がりペコペコと頭を下げた。

「それじゃどうもお騒がせしてすいませんでした」

最後に樋口順一郎は真樹にペコリと頭を下げ、店をでていった。

真樹は携帯を畳むとテーブルに置き、頬に手をあて深い溜め息をつく、目を細め斜めにそとをぼんやりと見つめ小さく何かを呟いた。

## ヨウチャン

10月8日 今日にはヨウチャンの誕生日

ヨウチャンは何時ものように、朝早く出て行った。

姫はすっかり8時間睡眠をとり、優雅に10時にランチ。焼きたてのバターロールに一昨日高島屋で買った、ワンピース2500円の高級ブルーチーズをちよつと浸けて、またまた高級なインド産のダージリンに頑固親父の牛乳

うーんやはり一流には一流、適材適所、東京は食の宝庫。ちよつと奮発さえすれば、そこらの喫茶店のモーニングなんて目じゃない。

こんな美味しい食材をヨウチャンはただ口に放るだけ。

…あーあ勿体無い、全く余裕の無い人生ってホントヤーネ。いくら体鍛えても、お日様サンサンのなかでがんばってもメラニン色素がバツチリ働いて、シミが増えるわ肌は黒くなるは熱射病になるは、胸は縮むし足は太くなるし、かわいそうに。しかも大声張り上げて酒飲んでそれじゃあ声枯れるしポリープになるよ。まったく一生懸命頑張つてそんなに早死にしたいかねーまっ何はともあれ冷蔵庫の中は、何時も体に良く美味しい物を常に置いてる。食こそが人間の基本なのだ。そして万能の薬は水！体を洗うには軟水、体に入れるときは硬水。水はあらゆる物質の媒体になり、体が勝手に要る物と要らない物を判断してくれる。

健康って簡単なんだよ、だけど間違つた知識が入るとダイエットとか青汁とか辛い思いして…無知って怖いね

つてな話はどうでもよくて、メンズノンノのキムタクのセミナード特集 ス・テ・キ

フーンシジミとワカメそしてサーフィンか…何々オフは早朝湘南…いこつかな

ニコニコウキウキ気分で確認確認 ケーキ良し、プレゼント良し、あとは…うーん料理？

どうも包丁とかフライパンとか持つと、勝手にシミュレーションかけてどうすれば華麗にカツコ良く一発でしとめられるか、こう勝手に踊ってしまうの。そして今日もなぜかお風呂場まで来てしまった。バカだと思われてるんだろうなきつと。監視カメラに向かってキメポーズをとってる私。

なんか最近、このパターンが多い。ひょっとして私って露出狂？あーあ、まっいいや、台所にもどろ。

まずはこの鳥さんの腹ん中にセロリと玉ねぎと…何だっけ？取りあえず葉っぱ入れとけばいいか、あとはレモンが何とかしてくれるでしょう。そんでもって塩胡椒なすりつけて…ウンシヨウンシヨ…そんなこんなで悪戦苦闘の三時間、パエリア、鴨のロースト、ビシソワーズ、全てバージンオリーブオイルでイタリア風に仕上げました。

うんうんさすが姫さすが私、一芸に秀でた者は何事にも通じる。完璧、素敵、生きてるって感じ。

午後3時、小雨が降ってきた。

私は雨が好きだ。

外の雑音を消し、無駄な景色無駄な予定何もかも人が作った物など簡単に握りつぶす、平等で差別など無い自然の力、そんな当たり前のこと何時も忘れている。何でも出来ると思いこんでいる私を雨はただ見てるだけ…部屋にいる私は何も出来ず雨を眺める…私は雨が好きだ。

午後4時ヨウチャンが帰ってきた。

ヨウチャンは衣装さんから借りてきた青いドレスに着替え、髪をアップするとこれまた小道具さんから借りてきたアクセサリーを付けた。

リボンにコサージュ、ガラスのピアスにネックレス…いいんだけどね…舞台用だからおっきいんだよね

鏡を見て色々聞いてくるがあんた、今ここであーだこーだ言っただけ、もう来てるよ馬面と樋口。それにあたしゃー給仕で忙しいんですけど…ヨウチャン何着ても大丈夫だって、今日の主演はドレスじゃないって

斉藤高司は腕時計、ピンクのバンドがかわいい…確かこれってアメリカのフルハウスやってた双子のブランドのやつじゃなかったけ。へーけっこう良い趣味してるじゃん。ヨウチャン、高いんだよこれ。樋口順一郎は、今年の芸能人名鑑…なめてんのかコイツは

「嬉しいー 二人とも本当に有難う」

ヨウチャンは満遍の笑顔でお辞儀し斉藤高司に抱きついた  
「で」

さすが役者さすが主役、二人には感謝のオーラを放ちつつ、背中からは私に冷たい殺気にも似たオーラを突き刺す。

「うん？」

「おケイは？」

ゆっくり顔を振り返る。

怖いって

「ま・さ・か、無いって事無いよね」

だから怖いって

まっ計画通りだけど

「今の言葉プレイバックプレイバック、プレイバック」

「な、なに？」

キョトンとしてる

私はエプロンのポケットから鍵を出し渡した。

「これって…くるま？」

「そう、キーホルダーよく見て」

「うま？そして黄色と黒のチェッカーフラッグ…これってまさか」  
そう

「そう、真つ赤なポルシェ」

「ポルシェ?!」

三人は声を揃えて鍵とわたしを見入った  
うんうんそうだろうそうだろう

四人は駐車場でキヤツキヤツと騒いだ

はじめヨウチャンは盗難車と疑ってきたが、車庫証明とか見せると  
安心し笑ってくれた。

狙ってたとはいえやっぱりヨウチャンの笑顔は良い。

オートマ専用免許でもペーパードライバーであつても…あ・あれば  
のる事になるでしょう…

そんなこんなのサプライズもおわり、部屋に戻ってカラオケ大会。

ご近所さんの迷惑など関係ありません。いつもオーディションに落  
ちて荒れ狂うヨウチャンに比べれば可愛いものです。

ヨウチャンが五回目の蒲田行進曲を歌い始めた時、私の携帯が鳴つ  
た。

## 終演

真樹からの着信

私は部屋を出て通話ボタンを押した。

「来ちゃった」

「なんで」

「何でって…ともだち・でしょ」

「だれと」

「決まってるじゃない、ヨウチャンとおケイ」

「…わかった、今下りる」

エレベーターでボタンを押すと、携帯を口元にあて人差し指でリズムをとりながら、あれこれ余計な詮索としては、それらなるべく否定するように心掛けた。

エレベーターのドアが開き私はロビーにでた。

真樹は外で選挙広告のチラシを見ている。…不自然だ…そんな奴はいない。このマンションの入り口かエントランスで、このひどいザンザン降りを雨宿りしている方が自然なものを…めんどくさい

「真樹」

「おケイ」

真樹は縁にレースのあるチャラチャラした赤い傘を上下に揺らし歩いてきた。

…なに？

「バラ」

胸元一杯に色とりどりのバラとかすみ草の花束を、真樹は大事そうに持っていた。

おかしい…

「へん？」

自分で言うな

「変」

愛の告白じゃあるまいし…色によって意味も変わるんだっけ

「ダメ？」

駄目だ

「私から渡しとく」

一人？…雨で全然わからない。

私は神経を研ぎ澄まし気配を読み取りながら、真樹にゆっくりと近づいた。

「何で？」

私が聞きたいわよ、ずっとガンとばして…ちから入りすぎ

それに…花束握ってる手、親指見えてないし…下手すぎ、それじゃ子供でも分かるよ

銃？ナイフ？何でも良いよ、殺れるんならね

久しぶりに熱く白い炎が私に灯った

「私と話すだけじゃ駄目？」

まずは説得

一歩前に出る。

真樹は後ろに下がり首を横に振った。

フーン…外か

確かにここじゃ何時住人が来るか分からないし、監視カメラもあるしね。

「真樹今日は駄目、私も真樹も」

今日はヨウチャンの誕生日…真樹、あんたらしくないよ…直接手だすなんて…

一歩

真樹は花束を両手で握り、外に出た

銃！

そっという事



一昨日からこのマンションの両サイドは水道とガスの取り替え工事。  
住人しか入って来られない。

…しょうがない

私は入り口の自動ドアをぬけた

雨と工事の音がうるさい

真樹は反対のビルを背に私を見つめる…というよりガンをたれてる  
濡れるの嫌なんだよね…まっ計算に入ってるんだろうけど

「あんたに私は撃てない」

私の言葉に真樹のスイッチが切り替わった。

落ち着きと冷徹な眼差しで、ゆっくりと花束を地面に置くと空を見  
上げ立ち上がり雨を気持ちよさそうに両手を広げ受け止め微笑む、  
そして足を組み替えコルト532RSを私につき付けた

悲しい顔の真樹

最悪なパターン、私はその優しさの前では無力…よく分かってんじ  
やないの。

私を殺すことが出来るのも、私を殺して良いのも…あんただけだ

「どうしたの、何があったって言うの？昨日だって私達上手く仕事  
してきたじゃない」

「なんで」

真樹は細い声でそう言った

「なに？」

工事してようが雨が降っていようがちゃんと聞こえている  
聞こえなくても口ぐらい読める

「なんでヨウちゃんなの…私じゃ駄目なの」

周りに殺気は無い  
自分の手でか…

プライド…でも今日は駄目

「聞こえない、もっと大きな声で言ってよ。それとも私がそっち行こうか？」

叫べばとりあえずスッキリするでしょう

真樹はニッコリわらうと冷たい眼差しで叫んだ

「なんでヨウチャンなのよ」

やっぱりバレバレか私の考えなんか、さすが相棒

え！？

真樹あんたもしかして

「昨日樋口となに話したか知らないけど、なんでヨウチャンなの」  
そう叫ぶと私はマンシヨンに体を向けた。

シユン

弾丸が足下に走った

「お케이…終わりよ」

優しい言葉が私を包んだ

けどね真樹、あんたがどんなに強くても…あんたがどんなに恐ろしい人でも、そして何時も私を守ってくれても…今日は

「真樹おかしいと思わない、大声張り上げても、いくらサイレンサ―機能付きの銃ぶっぱなして誰も気付かないなんて」

真樹に背を向けたまま私は真樹に確認した。

「そうね…工事してるし雨降ってるからね今日」

真樹！！

「真樹！！」

振り返る

激しく怒りに満ちた私を、真樹は冷たい眼差しで優しくそして心地よい温もりで抱きしめるかのように、私の立ち上る熱い炎を冷たく

受け止める。

「行かせない」

「なんで」

声を荒げ雨の中に入る

分かってる

わがままを言ってるのは私、

何時もそうやって逃げてきた

ヨウチャンを護るために

それを理由に、自分を正当化し取り繕ってきた

分かってる、組織は甘くない、真樹にも限界がある

わかってる、わかってる、わかってる！！

わたし…私がヨウチャンに…ヨウチャンの…そばに…いなければ…  
いいの

…でも…でも

でも私の理屈は私の感情を抑えることは出来ない。

「お케이、ヨウチャンに入れ込みすぎなのよ」

そうかもしれない

「だから」

「…だから？…だからこうなってるの。もうちょっと頭使って私や  
組織にいい顔してよ」

そうかもね

「同じでしょ」

「何が？」

「私がヨウチャンのほう向いても、真樹のほう見ても、組織に体預  
けて誰かに抱かれても…いずれ…なるんでしょ」

「さあ、私は組織の中に入ってるけど誰とも寝て無いわ。ちょっと  
は期待したけど、地味な事務仕事ばかりよ」

「そうなんだ」

「そう」

「選択…間違えたのかな」

「たぶん」

「やり直し…出来るかな」

「それは…駄目だと思う」

「なぜ？」

「私が…今決めたから」

…そう

「そう」

私達はお互い銃を取り合いながら会話を進めていた。二人の服は血と泥に塗れ、私の顔は腫れ上がり鼻と口からドロツとした血が止まらない。真樹は綺麗なものの、私にヘッドバッドしたおでこがチヨツト赤いだけ。

だから私の上司なんだけどね。

殺らなきゃ…駄目？

「む・か・し」

真樹は私の頬を殴った

「草の想い…中学の時三人で見た映画、『ふたり』だっけタイトルそのテーマソングよね。あの映画見たあとずっとおケイ何時も口ずさんでたよね。そう何時も何時も、バカみたいに…シンナーやって先輩に犯されてる時も…口に突っこまれてる時も泣きながら歌ってたね。まっ私は好きだったから楽しんでたけど」

下を見る…私の鼻から血がポタポタ落ちて…それが流れていく  
「トランススイッチ…過去のトラウマから逃れるための記憶の封印、そして自分が危険と判断した場合それを回避する力。その力と精神状態を引き出す鍵、それが草の想い…でしょ」

塊の血全然流れていかない

「ヨウチャンはね…」

血が、血が、流れていかないよー！！

「ヨウチャンは何にもしてくれないの…いつもお酒飲んで私にあたるの、毎日美味しい物作っても『美味しい』って言うてくれないの、真樹が用意してくれたマンション家賃だつて言つて積み立ててる事も知らないの」

「だったら私がいるじゃない私が…」

うん、だけど真樹は私に銃を向けてるよ  
それに

「ヨウチャンには私が必要なの、私がいないとヨウチャンは…」

「お케이、子供じゃないの私達は…わかつてるでしょ」  
わかつてる

「でも…」

顔を上げ銃口に親指を入れ、真樹から銃を奪った

バーン

私の右肩は真つ赤に染まった

「ジュン」

なにこれ？

「やっぱり姉さんには無理か」

「ジュン」

「さっもう終わった」

…もう…終わった？

痛みと痺れの中必死で今までのやり取り、状況を確認し分析し直した…

わたしか

「そいつはもう使えない、姉さんにやられるくらいだからね」  
バカ

「樋口：こんな所撃ったって人は死なないの。ちゃんと真ん中狙わないと」

私は振り返り樋口順一郎に近づきながら左人差し指で額から臍まで正中線をなぞった

なに格好着けてんだろ私：

泣き出したい

生きたい

醜くても良いから

今ここで倒れちゃえば：

だけど：

私は銃口は真樹に向けたまま樋口順一郎に歩み寄る。

樋口順一郎は私の睨みに負けている。

最後の夜楽しかったよ：単純にセックス楽しんだね、愛してるだ君  
しかない貴方しかないなんて、本気で嬉しかったし本気でそう  
思ったよ。

もう：駄目：なんだよね

「樋口くん、お케이いた」

バン

「ま・き・？」

A h - i

バン バン バン バン

両腕両脚を撃ち抜いた

「ジュン」

バン

駆け寄る真樹に背を向けたまま撃った…別に当たって構わない  
来るな！

「何故、なぜヨウチャンを撃った」

達磨になった樋口順一郎の顎を蹴り上げ、仰向けになった体に跨ると、喉元に銃口をつきつけた。

「姉さんと…お前のためさ。組織はお前の素行に問題、つまりあの女が原因で組織を裏切ると判断した…実際こうだろ」

「だから」

「3ヶ月調査した、結構良い報告挙げただけどね。…姉さんの愚痴が結構効いててね…」

そう

私は樋口順一郎の銃拾い真樹に向けた

「む・か・し・ひーとのところに」

「お케이止めて」

「言葉・ひーとつ生まれて」

「そ・組織を敵にする気か」

「つたえてーねこの声を」

バン　バン　バン

終・演・か…

「草の想い」

「消去…完了です」

斎藤高司は四人の体を確認すると、向いのビルを見つめ携帯で報告した。

「ご苦労」

「責任問題になりませんか？」

「そうだな」

バン

「君の単独テロは、私のチームが最小限の犠牲で阻止した」

「そうですか、貴方はあくまで…有り難う御座います…」



五人の若者は幸せそうに、道端で眠りについた。  
雨は何も云う事はなく、ただ降っていた

## エンゲル係数と私

照明がつき丸いイタリア調のテーブルに向かい合う二人

「すみちゃん」

「何？」

「愛してる」

「・・・うん、愛してる」

「じゃさじゃさ今夜・・・」

子供ばい仕草に優しく見守る

そして効果音

「ハイ桂木ですが…すみ子ですか？ハアーいますが…すみちゃん斎藤って男の人」

ぶつきらばうに受話器を渡す

「っえ、あーバイト先のマネージャー」

「フーン」

そう言うのと小刻みに首を何度も横に振り、ウンウンて頷いて振り返り一歩進むと又首を横に振り…確認

そわそわしながらテーブルに向かう

台本にあるト書き

どう見てもそれじゃミスタービーンだちゅうのうざすぎ

「はい鈴木です。来週ですか？来週はちよつと…」

台詞はここまで後は何時もアドリブ、毎回かえる。そしてその都度ちゃんと一矢はリアクションして応える

そして新聞、バサバサ音立ててじっくり眺めて

「逆か」

静かな客席

すべてってるじゃない

だから舞台でそんな細かい芸しても、分かるわけ無いでしょ

「まったく一緒にいる純子まで被害被ってるし」

「すみちゃん、すみちゃん。宝くじは？」

「宝くじ？あつテレビの上」

どこから持ってきたか昭和の緑の14インチテレビ、宝くじはテレビの上にある家庭内アンテナの下。

一矢は宝くじを取ると新聞と照らし合わせる

「違う・・・これも、これも、うん？すみちゃん、すみちゃん」

「えーですから・・・あつすいません、今料理の途中なんでその件は今度、では」

電話を切り一矢に歩み寄る純子。

ここからが純子の見せどころ

「何、当たったの？」

「いや、違ってた」

「なーんだ」

「アーア番号は合ってたんだけど組が違ってた」

宝くじを取り挙げ純子は舞台全体を動き回る

「エッ、何等と番号が一緒だったの」

「一等だよ一等、一億二千万だぜ一億二千万・・・当たってればな新聞も取り上げテーブルをぐるぐる回る」

「本当だ、番号合ってるじゃない」

純子は一矢に後ろから抱きつき頬を合わせる。

こついった大胆さは男には出来ない、女の特権なのだ

「だ、だろ」

振り向けない…チューしちゃうもんね

「でも」

「でも？」

「組違い賞つてあるんじゃない…ほらあつた組み違い賞」

「くみちがいしよう？」

「一千万円だつて」

「いっ一千万!？」

純子は新聞をテーブルに置くと舞台中央に立ち宝くじを両手でもって頭を傾け微笑む

「本当だ、組み違い賞。一、十、百、千、万、十万、百万…百万だよそれ」

「うん？…百万？でも当たってるのよねー。嬉しーこれ私のね」

ここからがいんだよね二人とも

「エッ、まっ待ってよすみちゃん。それ僕のだよ」

「違うわよ、私が買ったのよ」

「でもすみちゃんあの時、お金が無くて僕のお財布から半ば強引にお札三枚取り上げて…だからその宝くじは僕のお金で買ったの」

「でも買おうって言わなきゃそのままこの宝くじは誰かの手に行ってたわけでしょ。そしてこの宝くじは女の感って言うか、私のあまりの美貌にこの宝くじの方から声をかけて来たのよ」

「意見あり」

「なんですか一矢検事」

「すみ子弁護士、ここは公正明快に折半が望ましいと思われます」

「わかりました一矢検事。それは、み・と・め・ま・せん」

「では実力行使あるのみです」

じゃれあう二人、宝くじが床に落ちる 二人の手と手が宝くじの上で重なる

大事に二人の手で宝くじを掲げる

「すみちゃんこれで車買うよ」

「そうね、そうしたら色んな所行きたいわね。海とか山とか」

「うん。京都とかもいいよ」

「でも明日ね決めるのは、今はもう遅いし」

「うん、そうだね」

「ねえカズくん、私の事愛してる？」

「もちろん、愛してる」私のあまりの美貌にこの宝くじの方から声をかけて来たのよ」

見つめあい抱き合う二人

暗転

カーテンコール

拍手が鳴り響く中壇上に上がり純子に花束を渡す

「ヨウチャン」

「よかったよ、お케이」

みてくれたんだ

がんばったよ…わたし

「高司も」

斎藤高司とヨウチャンは見つめ合う

「あーらミス藤本体大丈夫なの？この子田中恵子さん、ここの劇場の偉い人が紹介してくれたの」

「とてもすばらしい演技でした」

「有り難う御座います。お体が宜しければ明日からはお願いします」

「え？」

「ミス藤本もう大丈夫なんですよ、さっ最後のダンスよ出来るわね」

「あっはい」

「いくわよミュージックスタート」

目を丸くしてキョロキョロしてるヨウチャン  
マリリン強烈だからね

「ヨウチャン踊ろう」

「うん」

五人の若者はここに再び募った

七色に変わる舞台  
やっぱりヨウチャンには適わない  
ヨウチャンの笑顔が一番好き

昔ひとの心に  
言葉ひとつうまれて  
伝えてね この声を  
草の思い

風にこの手がざして  
見えない森訪ねて  
あなたの唄を探して  
かくれんぼ

わたしの足音を聞いてね  
確かな眉を見てね  
そしていまは  
言わないで

ひとり砂に眠れば  
ふたり露に夢見て  
よろこびとかなしみの  
花の宴

時は移ろいゆきて  
ものはみな失われ  
朧に浮かぶ影は  
ひとの想い

いまは遠い心に  
寂しく憧れ来て  
あなたの夢にはぐれて  
かくれんぼ

わたしの唄声を聴いてね  
遙かな笑顔見てね  
そしていまは  
抱きしめて

時は移ろいゆきて  
ものはみな失われ  
朧に浮かぶ影は  
草の想い

ひとり砂に生まれて  
ふたり露に暮らせば  
よろこびとかなしもの  
花の形見

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8069e/>

---

草の想い

2010年10月11日12時44分発行